

一般演題8-4

高気圧酸素治療について行った勉強会の紹介

中野由惟¹⁾ 金田智子¹⁾ 田島行雄¹⁾
 齋藤 繁²⁾ 近松一朗¹⁾

- 1) 群馬大学医学部附属病院 MEサブライセンター
 2) 群馬大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科

【はじめに】

当院は、第1種高気圧酸素治療装置と第2種高気圧酸素治療装置を所有しているが、通常の治療では第2種高気圧酸素治療装置を用いている。患者は、治療初回時に麻酔科外来で医師から治療の説明を受け、その後高気圧酸素治療室にて臨床工学技士から治療開始時間や持込み品等についての説明を受けたのち治療を開始している。医療スタッフに対しては、高気圧酸素療法の治療開始時間を案内するのみであった。近年、治療対象となる患者が増え、高気圧酸素療法を知らない医療スタッフの病棟に患者が入院することが出てきた。その結果、治療に対する認識不足から、治療開始時間が遅れ他の患者を待たせる事例を数度経験した。

【目的】

医療スタッフ向けに高気圧酸素療法について理解を深めてもらうため、勉強会を開催したので紹介する。

【対象および内容】

全病棟看護師を対象に、高気圧酸素療法の勉強会開催の案内をした。勉強会は、講義と体験コーナーの2部構成で行い、多くの看護師が参加出来るように5日間開催した。講義内容は、高気圧酸素療法の原理や工程、治療中の注意事項等を説明した。治療室内環境変化は、市販のペットボトルを用いて、加压時に凹み減圧時では戻る過程を見てもらった。また、ハードボトルの薬液を自然滴下で点滴されていることを想定し、エア針の有無で点滴速度が変化する過程も見てもらった。体験コーナーでは、希望者を募り治療圧と同じ2気圧を体験してもらった。最後に参加者全員にアンケートを行った。

【結果】

参加人数は、講義が73名、体験コーナーが74名であった。参加病棟は、麻酔科・放射線科・消化管外科・循環器内科等、高気圧酸素治療対象患者の入院有無にかかわらず多くの病棟から参加があった。自然滴下の変化では、加压前に約7秒に1滴の滴下速度だったものが、エア針が無い事で減圧時には約0.3秒に1滴の速さに変化する過程を見てもらった。これによりエア針の必要性を理解してもらえた。



写真1 体験加压開始前の様子

体験コーナーは、予想を大きく超える参加希望があり、5日間では対応できず更に5日間追加した。(写真1)また、このコーナーで気圧の変化に伴う耳閉感や耳の痛みを訴え、体験加压を中止するケースもあった。アンケート集計では、高気圧酸素について知っていたが39%、なんとなく知っていたが59%であった。勉強会内容についても、ちょうどいいが97%であった。(図1, 2)アンケートのコメント欄には、体験加压をしたことで患者の気持ちがわかったという意見や、次回も参加したいという意見があった。

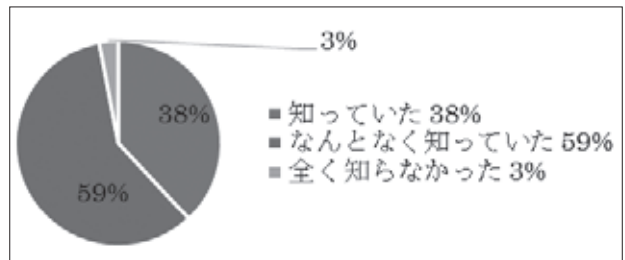


図1 高気圧酸素治療の認知についての結果



図2 勉強会内容の難易度についての結果

【まとめ】

第2種高気圧酸素治療装置は、複数の患者が同時に治療すること、治療室内環境が病棟と異なることについて説明を行い、体験コーナーを通して耳閉感や環境変化を実体験してもらえた。今後も継続して勉強会を開催し、多くの医療スタッフに高気圧酸素治療を理解してもらい、円滑な治療が行えることを目指していきたい。